

邪馬台国は大和である

—十月例会より— (大意)

東アジアの古代文化を考える会
確井 洗

一、はじめに、「魏志倭人伝」とは

中国の正史である「三国志」の中の「魏志」で「倭」について記された部分である。二千文字で構成される。これが「邪馬台国」の基本的なデータで、古来、その解釈をめぐって多くの論争がなされ、現在に至っている。

邪馬台国の所在地については「九州説」と「大和説」があり、今日の皆さん方は「大和説」が圧倒的に多いので私はちよつと話しにくい面もある。「九州説」が多ければ挑発的に面白く話をはこべるかもしれない。

邪馬台国にいたるルートの解釈は、大きく分けて「連続式」と「放射式」があるが、私は「複線式」で大和を証明できると考えた。

また、文字の解釈だけにとられず、考古学上の資料、図、絵、数量化等使えるものは最大限に使って考えることが大事であると思う。

はじめに結論めいたことを述べてしまったが、以下、個々について説明する。

二、「倭人伝」各国名の比定

対馬、一支、末盧、伊都、奴の各国の位置については、ほとんど異論がなく、ほぼ確定している。ところが、次の不弥国、投馬国、邪馬台国について意見が食い違ってくる。

以下、不弥国、投馬国、邪馬台国の三国について、国名考証からその位置を比定する。

不弥国

不弥国の「フミ」は「ウミ(海)」の音韻変化したもので、旧豊前国、旧豊後国に閩門海峡の対岸、本州側の周防国、長門国を含む、海洋・海峡国家に由来する国名である。北九州から邪馬台国行程上の陸行から、周防灘水行の重要な中継地であり、また伊都国から投馬国への日本海沿岸水行

の北九州から本州への最初の寄港地である。

投馬国

投馬国は旧丹波国である。「ツマ(投馬)」は「ツバ(端)」の転で、帽子のツバ(端)のように「突き出して高くなった所」のことで、日本海に突き出た丹後半島に由来する国名である。

邪馬台国と並ぶほどの大国で、大陸や日本海沿岸諸国との海上交通の要地でもあり、また邪馬台国の北の門戸として

陸上交通の要地でもあった。伊都、投馬の日本海水行ルートは北九州と畿内を結ぶ、四国・瀬戸内ルートのパイパス的役割を有していたのであろう。

邪馬台国

「ヤマタイ(邪馬台)」は、「イヤマ・タイ」の母音「イ」が脱落したもので「イヤマ(囲山)」とは、周りを山で囲まれた奈良盆地に由来する国名である。なお、「タイ」は朝鮮語で「トイ(北)」を意味し、私の国名考証で山城に比定した邪馬(山城)の北の国と言うことになる。実際は山城の南に位置するが後述の「二十八宿方位」で考え「北」を南と読み替えればうなずけると

旁国比定

旁国についても諸説があるが、二十一の国名の並び方が九州から大和へのルート順をあらわす重要な意味を含んでいるのではないかと考えた。

表I 「倭人伝」各国の想定比定地一覧

「倭人伝」諸国	律令制諸国比定地(想定)
1) 對海 對馬	對馬
2) 一大 一支	壹支
3) 末盧	肥前
4) 伊都	糸島 [郡]
5) 奴	筑 (肥後・薩摩を含む)
6) 不彌	豊 (周防・長門・日向・大隅を含む)
7) 投馬	丹波 (但馬・丹後を含む)
8) 邪馬壹 邪馬臺	大和
9) 斯馬	出雲 (石見・隠岐を含む)
10) 巴百支	伯耆
11) 伊邪	因幡
12) 都支 郡支	越前 (加賀・能登を含む)
13) 彌奴	美濃 (飛騨を含む)
14) 好古都	尾張 (三河を含む)
15) 不呼	近江
16) 姐奴 姐奴	伊予
17) 對蘇	土佐
18) 蘇奴	讃岐
19) 呼邑	阿波
20) 華奴 蘇奴	和泉・河内
21) 鬼	紀伊
22) 為吾	伊賀
23) 鬼奴	伊勢
24) 邪馬	山城
25) 躬臣	摂津
26) 巴利	播磨
27) 支惟	吉備 (美作を含む)
28) 鳥奴	安芸
29) 狗奴	駿河 (遠江を含む)
30) [女国]	(八丈島)
31) 倭儒国	北海道東部から南千島
32) 裸国	南米 (ブレインカ帝国?)
33) 黒齒国	北米 (マヤ?)

* 古代の各国境界は郡郷単位での異動があり、必ずしも律令国家の範囲とは一致しない。

三、邪馬台国への道

二つの旁国グループ

表I中、「旁国I」グループの日本海沿岸から北陸を経て東山道、近江に至る諸国と、「旁国II」グループの四国から山陽道に至る諸国の二つのグループに分けられる。

前者は日本海コースで、沿岸に瀉(ラグーン)を利用した寄港地が多く、青銅器も多く出土しているところからバイパスルートと考えられる。後者のグループは四国の西から東に真直ぐ畿内にむかっていて、更に大和を取り囲む形で旁国が並んでいて、この四国から淡路を経て和泉・河内を通るコースが、北九州から邪馬台国へのメインルートであることを示しているように思う。

邪馬台国モデルコース

地図上に「モデルコース」を想定すると、出発地である伊都国の前原付近と邪馬台国の都に想定される大和の桜井市付近を結ぶ最短距離のルートで両地点を直線で結ぶと、陸路の中心は四国北岸を東西に走る旧南海道、水路では北部九州の国東半島先端部から四国西部の高縄半島の間に飛び石のように連なる、姫島、祝島、屋代島(周防大島)等の島々および淡路島が浮かんでくる。

ではこの旧南海道を中心にその前後のルートも含めた伊都から大和への「モデルコース」を水行、陸行別に距離、日数を入れてみる。各所要日数は陸行一日十五、六キロ(律令国家での駅伝制の駅間距離は、後世の四里、つまり今日の約十六キロに相当するところから妥当と考ええる)、水行一日二十〜二十五キロ(茂在寅男『古代日本の航海術』小学館ライブラリー一九九三)で計算する。(水行の一部は一日三十キロで計算。「上潮」に乗れば一日三十キロの航行も十分可能と考えられる)。なお、出発してからの経過日数と通過地点(「駅家」としておく)は「国」別に「駅家」名を入れて表にしている(表II邪馬台国行程上の想定「駅家」と距離)。

陸行合計(四一五キロ、二十七日) 水行合計(二三〇キロ、一〇日)。総合計(六四五キロ、三十七日)となる。

「モデルコース」は邪馬台国行程路として、「想定倭国一覽地図」に線を入れていく。(図一)

距離

「モデルコース」の距離と「倭人伝」の距離を比較すると、「倭人伝」は帯方郡から女王国までが、一万二千里とするので、帯方郡から伊都国までの一万五里を差し引くと、

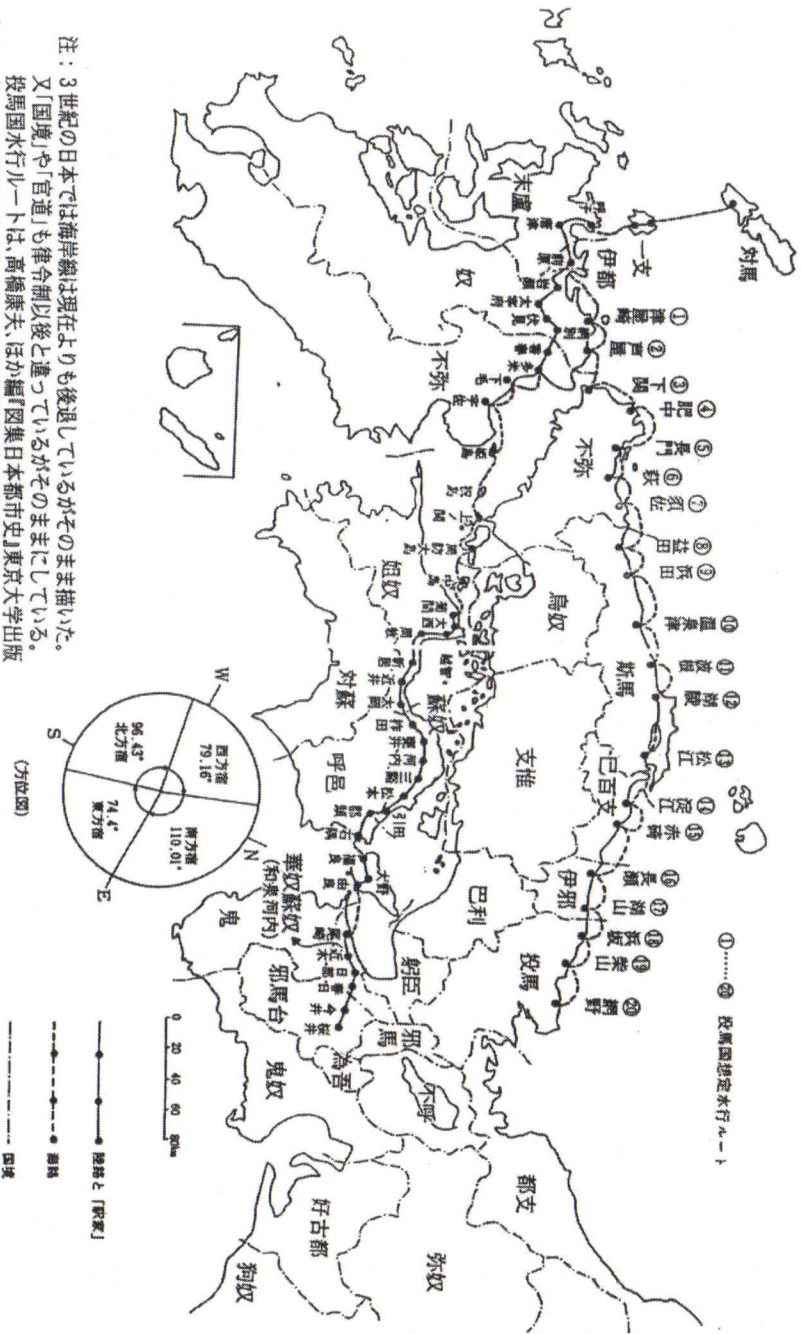
表II 邪馬台国行程上の想定「駅家」と距離

国名	駅家	所在地	日数	距離
(伊都)奴	前原	(福岡)	1	
			2	
(不弥)	石	(筑徳・山口)	3	
			4	
(水行)	伏見	(庄内・有井)	5	
			6	
(姐奴)	網多	(中津)	7	
			8	
(蘇奴)	香多	(長島)	9	
			10	
(呼邑)	下宇	(屋代島)	11	
			12	
(華奴蘇奴) 邪馬台	姫島	(今治)	13	
			14	
(呼邑)	祝島	(小松)	15	
			16	
(蘇奴)	上ノ	(新居浜)	17	
			18	
(呼邑)	周防大島	(土居)	19	
			20	
(蘇奴)	大越	(川之江)	21	
			22	
(呼邑)	新居	(多度津)	23	
			24	
(呼邑)	近井	(高松)	25	
			26	
(呼邑)	大岡	(板野)	27	
			28	
(呼邑)	柞田	(洲本)	29	
			30	
(呼邑)	河内	(阪南)	31	
			32	
(呼邑)	三松	(堺)	33	
			34	
(呼邑)	引都	(太子)	35	
			36	
(呼邑)	石碕	(檀原)	37	
			38	
(呼邑)	大野	(桜井)	39	
			40	
(呼邑)	由良	(大川)	41	
			42	
(呼邑)	尾木	(鳴門)	43	
			44	
(呼邑)	春日	(板野)	45	
			46	
(呼邑)	近部	(板野)	47	
			48	
(呼邑)	今井	(板野)	49	
			50	
(呼邑)	都	(板野)	51	
			52	
(呼邑)	都	(板野)	53	
			54	
(呼邑)	都	(板野)	55	
			56	
(呼邑)	都	(板野)	57	
			58	
(呼邑)	都	(板野)	59	
			60	
(呼邑)	都	(板野)	61	
			62	
(呼邑)	都	(板野)	63	
			64	
(呼邑)	都	(板野)	65	
			66	
(呼邑)	都	(板野)	67	
			68	
(呼邑)	都	(板野)	69	
			70	
(呼邑)	都	(板野)	71	
			72	
(呼邑)	都	(板野)	73	
			74	
(呼邑)	都	(板野)	75	
			76	
(呼邑)	都	(板野)	77	
			78	
(呼邑)	都	(板野)	79	
			80	
(呼邑)	都	(板野)	81	
			82	
(呼邑)	都	(板野)	83	
			84	
(呼邑)	都	(板野)	85	
			86	
(呼邑)	都	(板野)	87	
			88	
(呼邑)	都	(板野)	89	
			90	
(呼邑)	都	(板野)	91	
			92	
(呼邑)	都	(板野)	93	
			94	
(呼邑)	都	(板野)	95	
			96	
(呼邑)	都	(板野)	97	
			98	
(呼邑)	都	(板野)	99	
			100	

注：「駅家」は主に藤岡謙二郎『古代日本の交通路』1〜4、大明堂 1978-1979を参考にして決めた。また28倍の吉凶は、土御門神道造藤部鑑陰『陽対照九星配置統万年曆』、晴明社、1978による。各「駅家」間の距離は陸行15〜16キロ水行22〜25キロであるが、陸行最後の今井から都へは7キロ、また水行最後の淡路の由良から本土への水行は30キロとする。

確井洗『邪馬台国は大和である—邪馬台国四国ルート論—』近代文芸社 1997

図1 想定倭国一覽と邪馬台国行程路



注：3世紀の日本では海岸線は現在よりも後退しているがそのまま描いた。
 又「国境」や「官道」も律令制以後と違っているがそのままにしている。
 投馬国水行ルートは、高橋康夫、ほか編『図集日本都市史』東京大学出版
 会 1993所収の北前船の港町（西廻航路）を参考にして作成した。

伊都国から邪馬台国までの距離は千五百里となる。それを
 当常用の魏尺で換算すると、一里約四三〇メートルだか
 ら千五百里は六四五キロとなり、「モデルコース」の距離の
 総合計とピタリ一致する。

日数

日数についてはどうか。「倭人伝」は「水行十日陸行一月」と記す。「モデルコース」では、水行は三つに分かれるが、合計日数は十日である。陸行は四つに分かれるが合計日数は二十七日である。太陽・太陰暦では「一ヶ月」は二十九日或いは三十日であり、これでは二、三日足りない。これはどう考えたらよいのか。天文学で、月が天空を一周する周期を一恒星月と言い、その日数が約二七・三二日であるところから、それと「モデルコース」の陸行二十七日と端数約七キロを合わせた分がほぼ一致するので「陸行二十七日」を「陸行一月」と言ったのであろう。

方位

二十八宿星座は高松塚古墳の天井に描かれていたため有名になった。このとき、「二十八宿方位」で「倭人伝」の方位問題は解決するのではないかとひらめいた。

「二十八宿方位」は図1下部の（方位図）のとおり南北

が逆転している。

「二十八宿方位」で「倭人伝」の方位記事を読み替えたらどうなるのかを見てみる。

倭人在帯方東南大海之中。

倭人は帯方の東（東南）そして南（北東）大海の中にあ

り。
 從郡至倭循海岸水行歷韓國乍東到其北岸狗邪韓國七千余里。

郡より倭に至るには、海岸に循って水行し、韓国を歴て、乍は南（北東）乍は東（東南）から行ける。その北岸（南岸）狗邪韓国に到る七千里。

南渡一海千余里名曰瀚海至一大国

南（北東）の一海を渡る千余里、名づけて瀚海という。

一大（一支）国に至る。

東南陸行五百里到伊都国。

東（東南）そして南（北東）に陸行五百里にして、伊都国に到る。

東南至奴国百里。

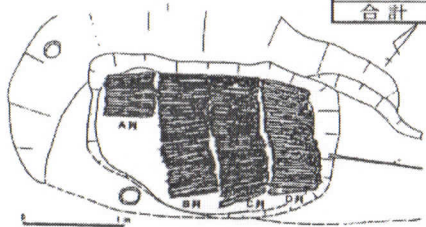
東（東南）そして南（北東）奴国に至る百里。

表Ⅲ

巨大青銅器遺跡出土の青銅器の数

1年=3 6 5日 (3桁) =14
 28宿=27.32日 (4桁) =14
 円周率=3.1415 (5桁) =14

出土地	遺跡名	青銅器別出土数				計
		銅鐸	銅劍	銅矛	銅戈	
出雲 (山陰)	荒神谷	6	344 (x10)	2 (中銅)		
	計	6	358	14 (中銅)		380
	加茂岩倉	14 (x10)				
	計	25				39
神戸 (山陽)	桜ヶ丘				7	21
	合計	59	358	16	7	440



荒神谷遺跡出土銅劍本数

列記号	銅劍本数	偶・奇別
A	34本	偶数
B	111本	奇数
C	120本	偶数
D	93本	奇数
合計	358本	偶数

偶・奇数別合計数の差

$$(B+D) - (A+C) = (111+93) - (34+120) = 204 - 154 = 50$$

偶・奇数列毎乗数の和

$$(A \times B) + (A \times D) + (C \times B) + (C \times D)$$

$$= (34 \times 111) + (34 \times 93) + (120 \times 111) + (120 \times 93)$$

$$= 3774 + 3162 + 13320 + 11160$$

$$= 31416$$

— 円周率と魔法陣 — $\pi = 3.141592\ 6535897\ 9323846\ 2643383\ 2795028\ 8\dots$

(三方陣)

15	2	9	4	15
	7	5	3	15
	6	1	8	15
	15	15	15	45

(π 9桁の三方陣)

11	1	9	3	12
	5	4	2	11
	5	1	6	12
	11	14	11	36

(π 16桁のパターン)

	(e)	
(a)	15	(c)
	(f)	
	6	
	(g)	
(b)	14	(d)
	(h)	
	5	

(四方陣)

34	8	11	14	1	34
	10	5	4	15	34
	3	16	9	6	34
	13	2	7	12	34
	34	34	34	34	136

(π 16桁の四方陣)

20	5	6	9	1	21
	5	3	3	9	20
	2	9	5	3	19
	8	1	4	7	20
	20	19	21	20	80

東行至不弥国百里。
 東(東南)行不弥国に至る百里。
 南至投馬国水行二十日。
 南(北東)投馬国に至る水行二十日。
 南至邪馬壹国女王之所都水行十日陸行一月。
 南(北東)邪馬壹(台)国に至る。女王の都する所、水行十日陸行一月。
 かくして、発想の転換により邪馬台国大和説の弱点と言われてきた方位問題を解決させることで、邪馬台国大和説を大きく前進させることができたと考ええる。
 四、むすび
 邪馬台国論争の行程論と共に最も活発な論点となつていのが三角縁神獸鏡である。もしそれが卑弥呼に賜与されたとされる「銅鏡百枚」であるならば、その分布の量、及びその配布の傾向から見て邪馬台国は大和であるといわれている。
 東北アジア青銅器文化圏として中国東北地方の南部、朝鮮半島、西日本が同じ文化圏にあった。朝鮮半島で出土し

た銅劍と瓜ふたつのものが日本で出土している。
 青銅器の埋納数に太陽年、二十八宿さらには π (円周率)の数字が見られることは、(表Ⅲ中段)青銅器祭祀が天文道・陰陽道に通じる祭祀であったことを示すものであり、これは太陽や月などの天文運行と円周率が関係あることを示したものと考える。
 それは太陽年や二十八宿の日数と円周率の数字の共通性にあると思われる。その共通するのは、それぞれの数字の最初の三つ五の桁数の合計が数字の十四になることにあると考える。(表Ⅲ上段左)そしてこの十四という数が青銅器の数によく見られることは表に示すとおりである。(表Ⅲ上段右)そして円周率の最初の十四桁の数字の配列をみると七桁を境にして前後でフラクタル(自己相似)の関係になってるのがわかる。
 円周率は数字がランダムに並んでいるように見えるが魔法陣と入れ子に同じようなパターンが言えるのではないかと。(表Ⅲ下段)つまり、円周率をとく解説表は魔法陣である。一方、「倭人伝」の方位をとく解説表は「二十八宿」の方位であると言いたいのです。
 (講演・著書から要約 文責 松本丞治)